

巨人の狩場で暴徒は踊る

蛇ヤミー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本作品は「小説家になろう」投稿作品「シヤングリラ・フロンティア」クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす」の二次創作となります。

趣味がゲームの暴徒がいかに堕ちるか。

この話は、ZーL A E G A氏が開催したR i o t F e a s tという、どうかしてる（ほめてる）祭り用に書いたものです。

ライオットブラッド小説大会と銘打ってるようですね。

概要についてはZーL A E G A氏の活動報告をご覧ください。

目  
次

# R i o t F e a s t

——ガキンツ

俺の機衣人ネフィリムが持っていた武器である破壊槌を落とし、大破する。

ネフィリム・ホロウ。

俺が今やっているこのゲームは、ストーリーやゲームシステム、戦術性やゲームバランスなど、多くの良さを持つゲームなのだが、なにごん操作性が悪すぎて一般受けしてないゲームだ。

とはいえ最近はその発売決定、それとある人物たちの宣伝で割と賑わってる。

このネフホロは割と長いこと続けてるので、俺も一応ランカーと呼ばれたりもする。

まあ、トップテンに入れないあたりをウロウロしてる程度のもんだが。

「あー……うん、流石にそろそろ眠くなってきた感あるな……負けも続いているし、トウナイト切れてきたか」

前日の仕事終わりからライオットブラッド・トウナイトを飲んで始めたネフィリム・ホロウだったが、二徹目も過ぎてきた頃合い。

トウナイトの効果切れといったところだろう。

今は……三時半、か。

「明日も割と早出だし、そろそろ寝るか……」

そして俺はゲームをやめ、眠りにつく。

~~~~~

朝七時、アラームの消してから、枕元に常備してあるライオットブラッド・クアンタムを一気にあおる。

やはり朝はこれに限る。

『迅速にあなたの脳を覚醒させる……』

そのキャッチコピー通り、迅速に脳を覚醒してくれるから、寝起きといえどクアンタムだろう。

時間帯の安定しない接客業で働いてるので、即座に頭を働かせなきゃならんのだ。

他の奴がクアンタムをどう扱ってるのかは知らないが、準備をしてきつさと出勤しよう。

今日もこなすだけの一日が始まる。

十四時、ようやく昼飯だ。

昼時は忙しくなりやすい。

ゆえに昼飯は早くても大体こんなもん。

「んー……残り仕事時間はあと半分。ここは爆発力が欲しいから、バックドラフト……と行きたいところだが、売り切れてたので、まあオリジナルでいいだろう」

個人的に味はオリジナルが一番好きだしな。

——カシユツ

グビグビと飲みながらふと思う。

合法堕ちするのはどういう感覚なのだろうか、と。

俺は、ライオットブラッドを飲むとき、日に三本を守っている。

企業がそう推奨しているならそれに準ずるべきだと。

だから簡単に合法堕ちするような奴はダメだと思っている。

最近の若い奴はあっさり合法堕ちするらしいが、覚悟も無しに堕ちたところで、聖人たちのように活躍など出来はしまい。

……もちろん、何本飲もうが、覚悟があろうがなかろうが、合法であることに変わりはないのだが、なんとというか……気持ちの話だ。

ライオットブラッドは合法。

気持ちとして、企業が推奨はしていない三本以上の服用や、アンデッドを死体に近づけるなどはしてはいけないという、俺なりの信念だ。

ただ、その信念を超えてくるほど、合法墮ちへの興味は尽きない。

「……アホなこと考えてないで飯食ってwikiでも見るか。新しいネフィリムの組み合わせも気になるしな。……後、そもそも死体に近づく機会がないわ、何考えてるんだ俺」

「もう七時過ぎてんじゃない……」

少し長引いた仕事も終わって家に帰る途中、いつものコンビニに立ち寄る。

俺が個々の常連ということもあり、ライオットブラッドはいつも箱で用意してくれてる優良店だ。

「バックドラフトと……トウナイトもそろそろ切れるんだったか……」

そう言ってレジに行こうとしたとき、何となく通常売り場コーナーに目を向ける。

「……あ……リボルブランタン」

リボルブランタンはシリーズで一番新しく出たもので、前に飲んだ時の感想としては、効力は完全に短期決戦向けのブースターといった感じだった。

俺は、趣味はダラダラと続けるたちなので、それ以降買う機会はなかったが、何気なく目に入ったそれは、俺に前見た番組を思い出させ

た。

二度にわたり、大物プログラマーを相手に、大立ち回りを見せた謎のゲーマー『顔隠し』ノーフフェイス。』

番組で見たそいつは、俺のような一般ゲーマーでさえ素の實力は高く柔軟性や思考力に優れたゲーマーなのだろうとわかった……が、それに加えて、ライオットブラッドの力を最大限に引き出した戦い方をしているように見えた。

そしてその戦いの後、彼の放った言葉は、ずっと頭に残り続けてる。

『ライオットブラッドを飲めばプログラマーにも善戦できます』

『ライオットブラッド・リボルブランタンのお陰でここまで来ました！』

紛いなりにもゲームを趣味とし、壁を越えられないながらも長年一つのゲームにこだわり続けてる俺は、その言葉に惹かれるものがあった。

もしかしたら、だからこそ昼間みたいな思考に陥ったのかもしれない。

「……………いやいやいや、落ち着け俺、疲れてるんだ。そもそも顔隠しノーフフェイス自身はギリギリを突いて合法堕ちまではないってないだろうが……………」

俺は頭を振り、リボルブランタンから目を逸らす。

「そうだ、これ以上進めば戻れなくなる。」

「これでいい。」

——本当に、それいいのか？

「?!?」

な、何だ今の……?」

どこから聞こえてきた?

というか、なんというか頭の中に直接言われてるみたいな……。

「……………」

いや、この際どこから聞こえたかはいい。

……今の声の通りだ。

本当にそれでいいのか?

確かにゲームは趣味だ。

だが、趣味だから勝てなくてもいいのか?

いや、俺は勝ちたい。

もつと、強く……たとえ趣味でも、上を目指していける奴でありたい。

その為に何が必要だ?

——ライオットブラッドだ。

決意を固めた俺の後ろから、奇妙な偶然か必然か、声をかけられる。

「ひっひっひ、そこのお兄さあん? ライオットブラッドをお探し?」

振り向くと、目元を髪で隠した怪しい風体の女が立っていた。

声から察するに割と若そうだ。

「私の店なら、海外製のライオットブラッドも沢山置いてるけど、どうするう? ……まあ? 見たところお兄さん、かなり摂取してる感じあるから、体の保証は、しないけどねえ……?」

「貰おう」

「えっ」



何という渡りに船。  
当然即答だ。

「買うといった。店はどこだ？ 近いのか？」

「え、え、あ、ちよ、え、も、もうちよつとくらい悩んだら？ お兄さんそれ、かなりヤバイ決断だと思っただけ!? 後、自分で言うのもなんだけど、私今ものすつっごく怪しいと思っただよね！」

先ほどの妙な雰囲気を漂わせた話し方とは打って変わって、随分と軽い口調になったな。

そっちが素か？

まあどちらでもいい。

「とりあえず店に案内してくれ」

「うう……なんか頭に響く声に従ってここまで来たけど、大丈夫なのかなあ……」

こいつも声に？

「……なんでもいいか。買うものは決まってるんだ」

「何？ 大丈夫だと思うけど、一応在庫と照らし合わせるよ？」

「ああ……バックドラフトとトウナイト、それと………リボルブラントンだ」

家についたのは二十時半。

俺は帰るなり買ったばかりの海外製バックドラフトと手持ちに  
あった秘蔵の海外製クアンタムをミックスする。

これで疲れた脳を再び覚醒させて、それを爆発的に使えるようにな

るはず。

「……ミックスは二本を一本分に配合する手法……海外製ではあるものの、実質一本分。朝と昼に飲んだ分を合わせてちよūd三本……だな」

俺はミックスを飲み干す。

これでガトリングドラム社が推奨している上限には達した。  
後は……。

俺は急いで準備をし、ゲームを立ち上げる。  
そして始める直前、ヘッドギアを付ける直前に、海外製リボルブ  
ンタンを取り出し。

——カシユツ！

躊躇わず、一気に飲み干した。

「さ、いくかあ……！」

ネフホロにインした俺は、迷わずある場所へ向かう。

そこは、このネフィリム・ホロウで長年ランキング一位を保持し続  
けている相手が常駐するドツグだった。

ランキング一位に挑戦状をたたきつける。

通常であれば鼻で笑われるかもしれないが、このネフィリム・ホロ  
ウのランキング一位である緋翼連理ひよくれんりを操る不死鳥フェニックス——ルストは、この  
手の挑戦を歓迎している。

それと、一応ランカーと呼ばれるだけあって、多少は顔を覚えても

らえていたらしい。

「あなたは……確かランキング十二位の」

「覚えてももらえてて光荣だ」

「あなたの構築は印象的」

「だろうなあ……」

俺の機衣人ネフィリムは最近では珍しい『近接型』だ。

それも射撃システムをすべて取っ払った『完全近接構築ビルド』。

そんなのネタですら作るやつがいなくらいだ。

なんでそんなの作ったかは単純。

破壊槌ラムムをメインに据えたかったんだよ。

「それで？ オペレーターはどうする？」

「有りに決まってるだろう。最強のあんた達と戦いたいんだよ」

緋翼連理ひよくれんりは単体でも強い。

だが最強たる所以は、オペレーターのモルドがついてこそ。

こいつらは二人で最強の一体なんだ。

このネフホロ内ではこいつらは既にプロゲーマーと呼んでもいい実力がある。

実際、ネフホロ好きを公言するプロゲーマーは多くいるが、未だランキング一位はルストなのだから。

そして俺はそれに勝ちに来た。

俺の言葉を聞いたルストは、ニヤリと笑い一言。

「……いいね。あなたはわかってる。……行こうモルド」

「え、ちよ待ってよルスト！」

そしてスタート位置につく。  
そのまま目を閉じる。

開始の音が聞こえた……どうせすぐに最強のオペレーターが俺を補足する。

だったら俺は準備を整えるだけ。  
その場で座禅を組む。

集中しろ……。

瞑目し……瞼の裏に宇宙が広がるイメージを創る。  
その星の海をまっすぐ……一直線に突き進む。  
目的の何か<sup>もの</sup>を見つけるまで。

まっすぐ。

まっすぐ。

まっすぐ……。

……。

——見つけた。

俺の中で何かが噛み合う。

暴徒の血が騒ぎだす。

目を開けば、視界に入る距離に緋色の機体が見える。

「……上等、叩き潰す」

俺は、メイン武器の破壊槌<sup>ラム</sup>を大きく振りかぶる。

——そしてこの日、俺はネフホロ最強の機衣人<sup>ネファイリム</sup>をあと一步の所まで肉薄することに成功した。

~~~~~

一戦だけ終えて、一度機体から降りて一息つく。  
まだ一戦しか終えてないが、この一戦はかなり消耗した気がする。  
もちろんまだまだ頭は冴えてるので、何戦でも行けるが。  
それにしても。

「あー……さすがに、付け焼刃じゃ勝ちを奪うまではいけなかったか」  
やはりランキング一位は伊達ではなかったな。  
だがそれでも、顔隠し<sup>ノーフェイス</sup>の言ったとおりだと思った。

『ライオットブラッドを飲めばプログラマーにも善戦できます』って  
さ。

ほぼプログラマーみたいな緋翼<sup>ひよくれんり</sup>連理に善戦できたんだから。

はあ……やっぱり——。

「——ライオットブラッドは最高だぜ!!」